関西大学博物館所蔵　テラコッタランプ

内野　花

はじめに

【ランプ】この言葉に、何を想像するだろう。擦ると魔神が現れるアラディンのランプだろうか。我々をそんな夢へと誘うランプが六つある。詳細は不明であるが、エジプト・カイロ出土のコプト時代のランプとされており、いずれもテラコッタ製である。蛙ランプ（Frog-lamp）と呼ばれるものや、釉薬を塗布したもの、男性生殖器を象ったものなど、その形状はさまざまであり、一括して「コプトランプ」という枠組みで扱うには違和感を覚える。ランプはその特性により、一般に使用年数が短く、その年代を色濃く反映している。また、埋葬品としても多く残っている。

そこで、所蔵の六つのランプをランプの形状編年と照らし合わせながら、個々のランプから読み取ることのできる当時の社会文化を考えてみたい。[1]

まず、西洋社会におけるランプの歴史の概略を述べる。[2]既知のとおり、火は人間の生活を豊かなものとした。原始、人間は火を得たことで、自然界からの身体の保護防衛を可能とし、また新たな調理法を編み出したのである。火は人間の生命維持の一端を担い、さらに、灯りや煤を利用しての芸術活動[3]が生まれ、また火を聖なるものとする信仰も誕生したのである。松明による照明から、より長時間燃焼に耐え得る固形もしくは液体燃料の発明、この頃にランプの原型が誕生したのであろう。最初はただの貝殻を使用していたと考えられる。[4]それが貝殻状または丸い皿状の土器となり、次第に二方向、または三、四方向から縁を内側に曲げて、燈火口が設けられるようになった。これら皿状ランプ（図一）[5]は、ロクロ式や底面を糸で平らに切り取る糸切り底製法で製作されたのである。

皿状ランプは、縁が大きく内側に曲げられるにつれ、注油口のみ開いた胴部に長い筒口の付いたランプへと発展し、上下型製法[6]が導入される。[7]貝殻のような皿形では、油漏れも往々にしてありえたであろう。[8]また、燈火口は縁を少し尖らせただけでは、燈心が油の中に滑り落ちてしまい、ランプの役割をなさない。燈火口をつまむ、または細長く設定することで燈心の滑り落ちを防ぐことができる。燈心の長さの長短、燈火口の数の増減で明るさの調節も可能である。注油口および燈火口の設定・縮小は、燃焼時間の延長・火災防止・明るさの増長、さらにはネズミの食油対策であったと考えられる。[9]卵型のランプが型抜き製法で大量生産に適していたとはいえ、皿状ランプはその製作過程の簡易さにより廃れるこ

となく、以後も使用されつづけた。

注油口が小さくなると、ランプ胴部上面に装飾が施されるようになる。ローマンランプは、ランプ胴部は基本的に丸く、円で縁取られた上面にはローマの神々や動物、植物紋などが施された。初期は両脇に渦巻き紋を施した長い筒状の注油口だが、次第に短い筒口へと変化していく。[10] さらに、キリスト教が栄えると、装飾はXとPの組み合わせ文字や、魚、鳩、十字架、肖像画へとなっていった。

一方、エジプトでは、初期は円筒状のランプであったが、ギリシア・ローマのランプ輸入により、神々の姿を象ったランプへと変遷し、コプト時代には「蛙ランプ」も出現した。カルタゴを中心とした北アフリカでは、キリスト教に纏わる紋様の、赤い化粧土が掛けられた赤色胎土ランプが製作された。孔のないつまみがついており、胴部上面の紋様が注油口まで続いているのが特徴である。幾分細長く、後のビザンチン様式への移行を窺わせる。また、ビザンツ時代の形状はイスラムランプへと引き継がれた。ランプは生活の場はもちろん、宗教と結びつきながら、あらゆる場で活躍したのである。

では、次に、所蔵ランプの個々の特色を見る。

一．白褐色テラコッタランプ（図二、写真一）

［幅五七㎜、長さ八二㎜、高さ五五㎜、六六ｇ　白褐色］

このランプは長く地中にあったためか、表面上に多数の付着物があり、形状からの年代特定は難しい。ランプ内部は表面とは異なり、腐食は見られない。燈火口（直径一二㎜）の反対側に設定されている把手には、ダイアモンドリングのような大小の円が重なった形の孔が空いている。ランプという夜の器具に何とも相応しく感じられる。筒口は、蓮の実の断面のように裾広がりで、両脇は微かではあるが、渦巻き紋のように整形されている。その先端部には、少しばかりではあるが、煤が黒く付着しており、実際に使用されていた形跡が残っている。

燈火口からすり鉢状に一〇㎜弱ほど落ち込んだ高さに注油口（直径六㎜）が小さく作られており、注油口に向かって傾斜しはじめるラインには、無花果の実、もしくはゴマの実の断面のような線描が施されている。また、さほど明瞭ではないが、上下の型による製法によるものと断定できる接合線が高さ二五㎜のところに途切れ途切れではあるが続いている。

二．茶褐色底面葡萄紋テラコッタランプ（図三、写真二）

［幅六四㎜、長さ八六㎜、高さ三二㎜、六〇ｇ　茶褐色］

これは所蔵されている中で、一番小さなランプであり、両端に把手代わりの耳（幅六㎜、長さ二〇㎜）が付いている。その耳には、笹の葉のような三本の細長い紋様がある。燈火口のある筒の付け根には、ローマンランプ特有の渦巻き紋の変形が施されている。また、燈火口の反対側に把手がついていたであろう痕跡が残っているが、[11] 実用的な持ち手はこの耳であっただろう。

これは損傷の激しいランプであるが、[12]その損傷部の断面を見るに、粘土の粒子が非常に緻密で、ランプそのものが堅い。よって、焼き斑があるが、高温で焼き上げたものであると考えられる。先端部が欠損している燈火口（推定復元直径一五㎜）から内部を見るに、壁面内部に接着ラインとみられる窪みが続いているため、このランプも上下型による製法であることがわかる。

このランプは装飾性に富んでいる。まず、注油口（直径八㎜）に向かって頂部全体がゆるやかに傾斜しているが、その周囲を丸く線描にて縁取り、[13]その円縁の燈火口付近に、小さな点が二つ施されている。おそらく、その位置からみて三つあるのが妥当だと思われるが、制作時、もしくは長年の使用による摩擦によって消失したのであろう。さらに、高台内部には、葡萄紋様が描かれている。五段の（上段から七・五・三・二・一つの丸で表現されている）葡萄で、枝も丸二つである。この葡萄は何を意味しているのか。

ランプ底部に施された紋様は、工房や陶工のマークであるとされている。[14]では、何故に葡萄を採用したのだろうか。このランプが発見されたエジプトにはセム族によってその栽培方法やブドウ酒造りが伝えられたというが、葡萄はギリシアのディオニソス神との繋がりがある。豊饒の神であるディオニソス神は酒（ブドウ酒）の神でもあり、絵画においては、葡萄の房や蔓を頭に飾った姿や、身辺に葡萄を配した形で描かれている。また、葡萄は実が多いことから「多産・豊饒」、蔓がよく伸びることから「永遠・生命」のシンボルとして捉えられており、オリエントでは豊饒の女神とともに描かれている。また、ブドウ酒は酔いの効能から「快楽・慰安」のシンボルでもある。キリスト教においては、後世の付加によるが、「キリスト・受難」などとして描かれており、葡萄は切り離せない存在である。ランプ胴部の丸さ、頂部に施された円の縁取り、灯火口付近の変形渦巻き紋などから、このランプは一世紀から二世紀頃のものと思われる。制作当時、社会における葡萄の占める地位の高さから、この紋様が採用されたと推測される。

燈火口と注油口とを結ぶ直線上に小さな孔（直径四㎜）が空いている。これは、おそらく、ランプ清掃用の棒を差すための孔だと考えられる。煤や埃の汚れは不完全燃焼の原因となり、新たな汚れを引き起こす。非常に興味深い点である。また、燈火口付近がかなり黒く変色しており、燈火口内部に煤が多量に付着していることから、実際に使用されていたのであろう。

三、桃色同心円紋テラコッタランプ「蛙ランプ」（図四、写真三）

［幅七四㎜、長さ九一㎜、高さ三六㎜、一二八ｇ　桃色］

桃色の地肌の表面を、クリーム色や淡い肌色のものが所々覆っている。これは、塗布されていた泥漿が使用中、あるいは地中で剥れ、次第に胎土である桃色が姿を現したものと思われる。このランプの燈火口（直径一二㎜）の付近全体には煤が付着しており、燈火口の内側にも表面と同様のものが付着し、その上に煤が付いている。表面に残存している泥漿は、おそらく制作当初に油漏れ対策として全体に塗布したのであろう。

表面の荒れに対して、内部に腐食は見られない。また、燈火口付近には、麦藁[15]が付着していた二本の痕跡が見える。

燈火口と注油口（直径八㎜）とを結ぶ延長線上に、少し盛り上がったつまみのようなものが付いている。[16]ごく普通の卵形のランプであるが、紋様に至極富んでいる。注油口を中心として、そこから一二㎜のところに同心円を、またその円縁より一五㎜下がったところに楕円の同心円を描いている。その円と楕円との間に、青海波のような四つの同心円の二分したものを左右に三つずつ配し、それぞれの間を四本の線描[17]で埋め、燈火口付近には斑紋様の紐四本が描かれている。このような卵形ランプを、その形状から「蛙ランプ」という。

蛙ランプ（Frog Lamp）とは、エジプト各地で発見されており、二世紀後半から五、六世紀頃にかけて一時に生産されたと考えられているランプである。一〇㎝程度の掌サイズの卵形ランプで、その名の通り、蛙の姿や顔、植物紋・幾何学紋など[18]が注油口の周囲に描かれているものを一括して蛙ランプと総称する。所蔵のランプも、形・紋様ともに、蛙ランプの要素を有している。

では、なぜ、ランプに蛙紋様を採用したのであろうか。コプトは既知のとおり、キリスト教社会であったが、その社会において、蛙とは否定的・悪魔的・異端的象徴である。しかし、古代よりエジプトにおいて、蛙はナイルの豊饒、または不完全な人間の象徴として捉えられ、時には創造神クヌムの妻ヘケトと関連付けられた。ヘケトは出産、特に分娩の最終段階をつかさどるが、これは蛙の多産性・生涯にわたる形状変化より、蛙が多産・創造・再生のシンボルとされていたからであろう。[19]春の洪水後ナイルの泥の中から生まれるとされている蛙は、復活のシンボルでもある。あるいは、水陸両性という特性により、二つの異世界を繋ぐ存在として描かれたとも推察できる。これら多数のシンボルでもある蛙は、護符にも採用されており、公式なキリスト教の導入後も、キリストの再生と結びついて、蛙崇拝はエジプト・コプトに残ったのである。

このランプには、他のものと同じく、ランプの胴部中央部一周に、接合線が続いており、上下の型を用いた製作手法によるものである。しかしながら、その接合線のヘラでの整形が非常に粗雑である。また、厚みがかなりあり、重い。接合線の粗雑さ、蛙ランプであること、形状の単純さ、重さ、紋様の複合性から鑑みるに、このランプは五世紀頃のものであろう。

四　茶褐色小突起紋テラコッタランプ（図五、写真四）

［幅六八㎜、長さ一二〇㎜、高さ四三㎜、七二ｇ　茶褐色］

堅く薄いこのランプは、注油口（八㎜）を取り囲むように、胴部上面周縁部に三列の小突起紋が施されている。燈火口（一二㎜）と注油口とを結ぶほぼ延長線上に三本のラインが入ったループ状の把手がある。ランプ胴部中央の接合面付近の小突起紋はヘラ整形時に消失したものとみられる。燈火口から注油口まで、緩やかな傾斜で下がっており、その傾斜の始まるラインには線描がある。その線描は、ローマンランプの筒口の渦巻き紋を、ランプ頂部に廻らせて一本にしたような形である。ラン

プ表面上は、かなりの焼き斑がある。所々白くなっている部分があるが、これは地中にあった結果であろう。内部に腐食は見られない。このランプは堅く軽いため、高温焼成によるものと考えられる。

形状からみて、初期ランプのような歪さはないが、雑な個所が多少ある。上下型接合面のヘラ整形の幅広さ・粗雑さや、注油口・燈火口ともに（燈火口を手前にして見た場合）中心から左寄りに位置がずれているのは、おそらく接合のずれ[20]が原因かと思われる。また、ランプ胴部および底部に、上部周縁部に装飾されているものと同じ小突起がいくつか付着しているが、これは製作時に削れた、もしくは同時に制作した同型の他のランプのものが付着したと考えられる。以上に挙げたものはすべて大量生産に伴う制作上の粗雑さによると思われる。把手の線描の歪みもその一つであろう。

洗練された形状・周縁部に施された紋様・堅く軽い・粘土の粒子の緻密さ・ヘラ整形の荒さなどからみて、このランプはランプ制作に地方色が出される二、三世紀頃のものと推定される。

五. 緑色釉薬テラコッタランプ（図六、写真五）

［幅六八㎜、長さ一一〇㎜、高さ六五㎜、一五八g　全面に緑色釉薬］

このランプは、所蔵している中で唯一釉薬のかかっているもので、美しいエメラルド色である。ランプ内部にも釉薬が塗られているが、塗布の濃淡がみられる。地中に長くあったためか、釉薬の削れているところが非常に多いが、[21]内部に腐食は見られない。燈火口（幅一三㎜、深さ九㎜）は半円の筒状であり、ランプの姿はまさにジョウロそのものである。注油口は、直径六八㎜の円柱状のランプ胴部から二五㎜立ち上がった裾窄まりの円柱の上部にあり、直径三〇㎜から一七㎜に窄まっている。燈火口の延長線上から多少ずれているが、注油口のある円柱とランプ胴部の円柱とをつなぐ形で、縦に長くループ状の把手が付いている。龍首のように、優美な形である。

使用頻度の過多を物語るのは、燈火口周辺に付着している煤やランプ底部の釉薬の剥れだけではない。燈火口周辺の釉薬に入っているヒビの細かさや釉薬の変色も同様であろう。

ランプ底部には、最大幅一五㎜、長さ二五㎜の歪な涙型の孔が空いている。人為的に空けた孔か、それとも使用過多による欠損か。孔は外側から内側に向かって広がるように空いている。よって、使用終了時、もしくは埋蔵時に、外側から硬いもので突いたと考えられる。

釉薬の塗布されたランプは、非常に珍しく、素焼きのものに比べると製作過程が繁雑であることを考慮するに、高級品であったのだろう。円柱の胴部という、古代エジプトの形状を受け継いでいることは興味深いが、年代特定は難しい。

六. 男性生殖器型テラコッタランプ（図七、写真六）

［幅四四㎜、長さ一〇四㎜、高さ五〇㎜、六一g　茶褐色］

なんとも不可思議なランプである。デフォルメされた自身の男根にぴったりと全身でしがみついている青年の姿をしているのである。その表情はまだ幾分、少年のようなあどけなさが残っており、満ちあふれる歓喜とも、穏やかな安堵とも、苦悩・畏怖とも読み取ることができる。青年の目・鼻・口・耳はもちろん、眉や髪の毛（巻き毛）、肋骨と細部まできちんと描かれている。青年らしい、すらりとした四肢にいたっては、指の一本一本を肉眼で見分けることができ、必死にしがみついている様が伝わってくる。男根は、亀頭・陰茎・陰嚢・包皮小帯・陰茎縫線・陰嚢縫線[29]が線描によって明確にされており、興味深いことに、肛門と思しきところから右下に少し傾斜した辺りに縦三㎜、横五㎜の楕円の孔が空いている。人為的に空けたものかどうかは判断できないが、大変興味深い点である。

地中に長くあったためであろう、表面に鉄錆の塊が所々に付着しているが、ランプそのものは非常に軽く硬い。形状の精密さを併せみるに、かなりの技術の高さがうかがえる。年代特定は非常に難しい。

燈火口（直径一二㎜）周辺が黒く変色しており、実際に使用されていたことがわかる。吊り下げ用の紐通しの孔が青年の首の付け根部分と臀部の上（ともに直径六㎜）にあるが、首の付け根部分の紐通しは接着部分が腐食しており、孔が空いている。また、他の五つのランプに比べて、内部の腐食が進んでいるように見受けられる。

注油口（直径七㎜、立ち上がり五㎜）は背中中央部、首の付け根部分にある紐通しの真横にあるが、身体の何処のデフォルメでもない。これに対して、燈火口は亀頭先端部に作られている。ここに燈心[30]を差し込んで火を点す。精液が迸っている様子とも、生命に溢れる精液そのものを模している様子とも見えるだろう。何とも神秘的であろうか。男根を模した姿をしているのは、精液、延いては生殖行為そのものへの畏怖・崇拝によるものであり、死や病気に対する魔除けの意も込められているのであろう。だが、男性生殖器であるべき理由は何だろうか。

エジプトには、男性生殖器を象った護符が数多く残っている。これは神話にその根拠がある。豊饒神のオシリスは弟セトに殺害され、身体を切り刻まれる。妹イシスは切り刻まれたオシリスの身体を集めるが、男根はLepidotusやphargus、oxyrrhyncusといった魚に食べられてしまう。そこで、粘土で男根を作り、その男根より息を吹き入れてオシリスを冥界の神として復活させたのである。また、オシリスの祖先である太陽神ラーは、自らの手と交わって大気の神シューと湿気の女神テフヌーとを産んだとされており、ここでも男根を生命源として神聖視している。すべて性を表すには男性生殖器を用いたのであり、男性生殖器に生命の神秘を見出していたのであろう。ランプに男性生殖器を用いることで、神秘の力で以って、夜の外敵を遠ざける、または脅かしていたのではないだろうか。

おわりに

以上、六つのテラコッタランプを見たが、いずれも上下型製法によるもので、装飾性に富んでいる。制作年代がほぼ紀元後であり、エジプトにおけるキリスト教化の時期、コプト文化の隆盛期（二世紀末～五世紀

頃）と重なることから、「コプトランプ」と一括されたのではないか。

「コプト」とは、慣習的に、コプト教会に属するエジプトのキリスト教徒を指す。「エジプト」を意味するギリシア語のAigyptosの派生語qubt／qibtや、メンフィスの別名プタの「家・寺院」を意味するHa-Ka-Ptahの音声転化など、語源には諸説がある。

ローマ帝国時代、およそ紀元後二世紀頃からキリスト教化したエジプト人＝コプト人は、コプト語・コプト文字を用いて聖書の翻訳も始める。また、ディオクレティアヌス帝の迫害で多くの殉教者が出た記念として、帝の即位年（二八四年）を元年とするコプト暦も作成する。ミラノ勅令やローマ帝国の国教化とともに、エジプトのキリスト教化は確固たるものとなるが、教義上の対立ゆえ、五世紀中頃エジプト独自の教会「コプト教会」が成立したのである。また、キリスト教世界ではじめて修道院制度を創始・発展させた。しかし、七世紀半ばにアラブ軍によるエジプト侵攻があり、エジプトはアラブの支配下に入る。アラブはコプト人のキリスト教信仰を容認、保護を与えたが、半世紀で重税を強い、コプト人は次第にイスラムへと改宗していったのである。[⑭]

光は、太陽という植物の生長をもたらす恵みであり、闇・混沌を照らす秩序と考えられている。光と、光を生み出す炎の生死をつかさどるランプ。それを手にすることで、人は夜という未知の世界を照らし、支配する空間・時間を広げたのだろう。

小稿をなすにあたり、関西大学博物館の山口卓也氏に多大なるご配慮を賜りました。また、文献収集にあたっては、片岡恵美氏、川口奈穂子氏、木下理恵氏にご助成いただきました。ここに記して、深謝の意に替えさせて頂きます。

註

① 当館所蔵ランプの個々の名称は、便宜上、その形状に則して筆者が付したものである。ランプの幅・長さ・高さは、ともに最大値を記した。なお、厚さは実測不能であったため、省略した。

② Forbes R.J., *Studies in Ancient Technology vol.VI (Heat and Heating /Refrigeration / Light)* E.J.Brill, Leiden,1963.

③ スペイン・アルタミラの洞窟壁画がその例と推定される。

④ 南メソポタミア・ウルの王墓（紀元前二五〇〇年前頃）の埋葬品に、巻貝を縦に二分したような形状のランプ（銀製）と、燈心口が多数ある帆立貝状のランプ（石製）がある。これらより貝殻がランプの祖形であったと推定される。

⑤ Amiran R., *Ancient Pottery of the Holy Land : from its beginnings in the Neolithic period to the end of the iron age*, Massada Press LTD.,Jerusalem, 1969.より、一部抜粋・転載。

⑥ 型には漆喰製や燃焼粘土製、蝋型（蝋型は青銅製のランプに用いられた）とがある。上下の型それぞれに粘土を貼り付け、型をあわせて整形し、注油口と燈火口の孔を穿って焼成するのである。これは、所蔵の葡萄紋ランプと桃色同

心円紋ランプの注油口の内側に、花が咲いたように粘土が付いていることからもわかる。

⑦ ヘレニズム期の特徴である長い筒口を持つランプは、ギリシアで紀元前六世紀頃にロクロ式で作られたが、紀元前二世紀頃になると、ロクロ式から上下型製法が主流となった。

⑧ テラコッタランプの油漏れの防止対策として、受け皿を下に敷いたものや、油の浸透出予防として内外面ともに黒塗りしているもの、釉薬を塗布しているものなどがある。

⑨ ギリシア時代にロクロで作成されたランプが長い筒型の燈火口を持つことからも伺える。

⑩ 渦巻き紋が施されている筒口の先端は、丸いものと、蓮の実の断面のように末広がりのものとがある。

⑪ 把手の接合面とみられる二箇所を観察するに、おそらく把手は上向きに付けられていたものと推定できる。

⑫ 上下型による接合面をヘラで整形しているが、燈火口付近以外はかなり粗雑である。

⑬ 注油口の縮小に伴って上面に円で縁取り、時代が下るにつれて、その内側に図柄を施すようになる。

⑭ 文字による記名や麦、数個の円などの刻印を持つランプも見つかっている。Hayes J.W., *Greek and Roman Clay Lamps : Ancient Lamps in the Royal Ontario Museum I*, The Royal Ontario Museum, Toronto,1980.

⑮ 「麦藁」と断定しているのは、このランプとほぼ同型のランプがカナダ・ロイヤルオンタリオ博物館に所蔵されており、それにも、「麦藁の痕跡（large straw impression)」が残っているからである。おそらく、ランプを焼成する際に、麦藁を使用したのであろう。(Hayes, 前掲)

⑯ 四世紀から七世紀にかけてカルタゴを中心とした地域で制作された縦長の北アフリカタイプのランプにも孔なしつまみが付いているので、そのつまみの原形かと思われる。

⑰ これをHayesは「両側に三つの水玉蓮紋様付き円弧（three multiple arcs on each side, with "lotus patterns" of dots between)」と表現している。また、燈火口付近にある斑の紐紋様を「葉付き小枝（leaf sprays)」としている。(Hayes, 前掲)

⑱ 初期は蛙の姿・顔が描かれていたが、植物紋や幾何学紋へと移行していった。

⑲ 卵・オタマジャクシ・カエルという個々の形状変化において、その時点での生を終え、死を迎え入れてから新たな形状・生へと再生するという考えに基づくもので、他の民族・地域にも多くみられる思想である。

⑳ 同様に、ランプ上部左側のヘラ整形幅が極端に広いことから、上部は右方向へ、下部は左方向へとずれている。

㉑ 注油口やランプ胴部の周縁部は釉薬層すべてが削れているが、底部は薄い釉薬層が確認でき、注油口付近の釉薬層の削れ部分には煤が付着していることから、使用頻度の過多も削れの原因と考えられる。

㉒ このランプの陰茎縫線と陰嚢縫線は途切れているが、実際には繋がっている。

㉓ ヒエログリフの燈心を意味する文字として、 がある。これは「亜麻を縒った燈心（wick of twisted flax)」であり、主として亜麻が用いられていたと推定できる。(Gardiner A., *Egyptian Grammar : being an introduction to the study of hieroglyphs 3rd ed.*, Griffith Institute : Ashmolean

Museum,Oxford,1988.）また、オイルランプについても、触れておく。「ゴマ・麻・モリンガ・オリーブ油」（加藤一朗「コプト人のランプ」『阡陵』九関西大学考古学等資料室、一九八四年）などが考えられるが、ランプオイルは [illegible] と記す（Hannig R., *Grosses Handworterbuch Deutsch - Agyptisch : Die Sprache der Pharaonen : (2800-950 v. Chr.)*, Philipp von Zabern,Mainz,2000.）。これは「ランプ [illegible]」「の [illegible]」「油（ゴマ油）[illegible]」であり、主にゴマ油が使用されていたと推定できる。

㉔ 飯森嘉助「エジプトにおけるコプト小史」『中東通報』二八〇、中東調査会、一九八二.

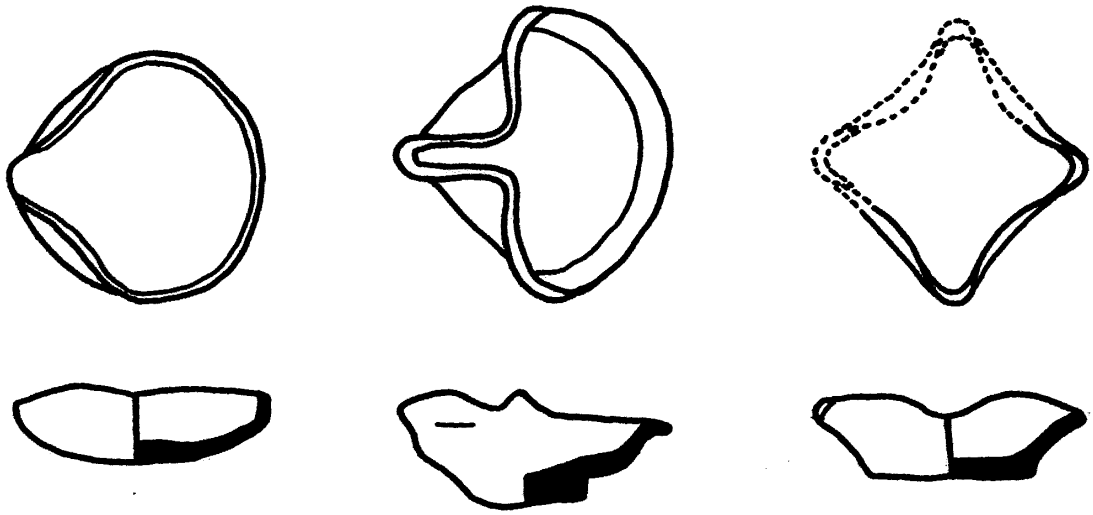


図１　皿状ランプ実測図（【Amiran1969】より一部抜粋・転載）

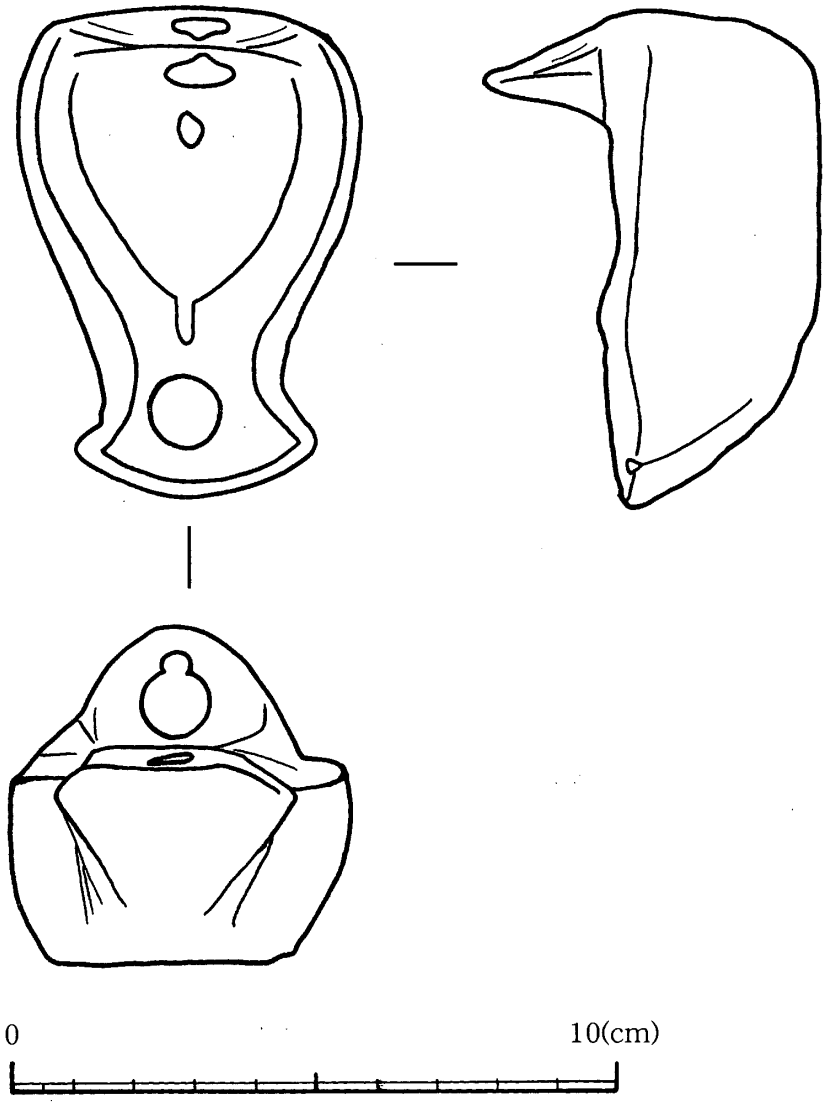


図２　白褐色テラコッタランプ実測図

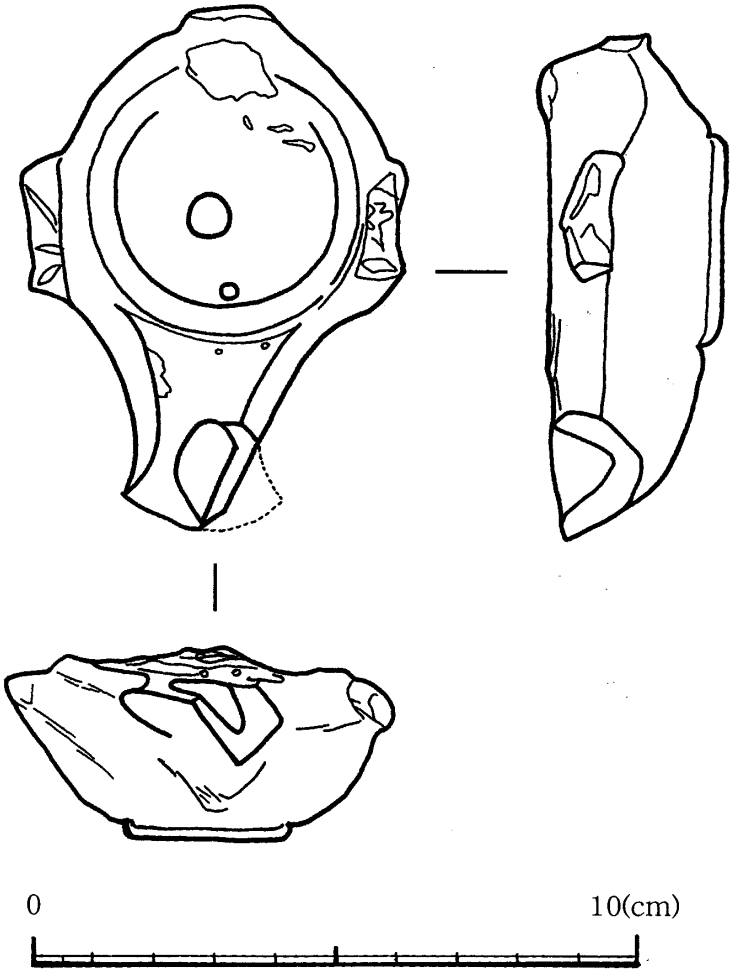


図３　茶褐色底面葡萄紋テラコッタランプ実測図

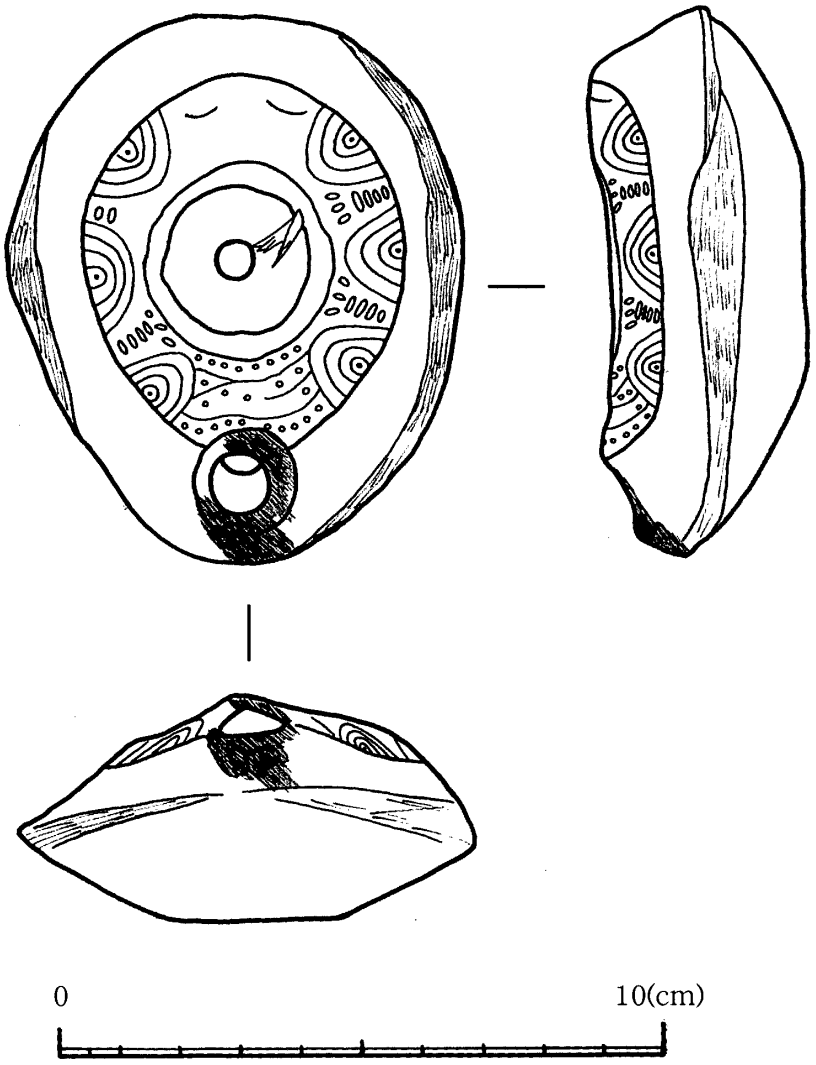


図４　桃色同心円紋テラコッタランプ実測図

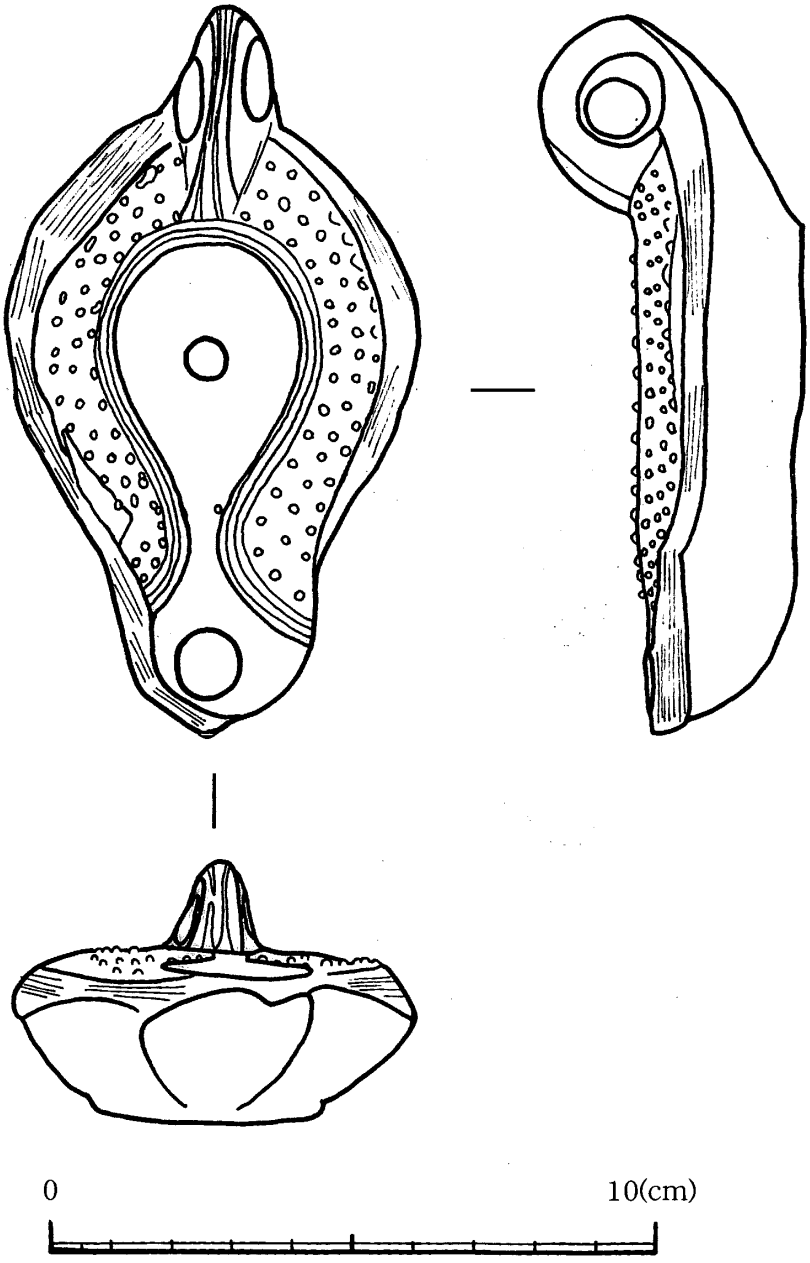


図５　茶褐色小突起紋テラコッタランプ実測図

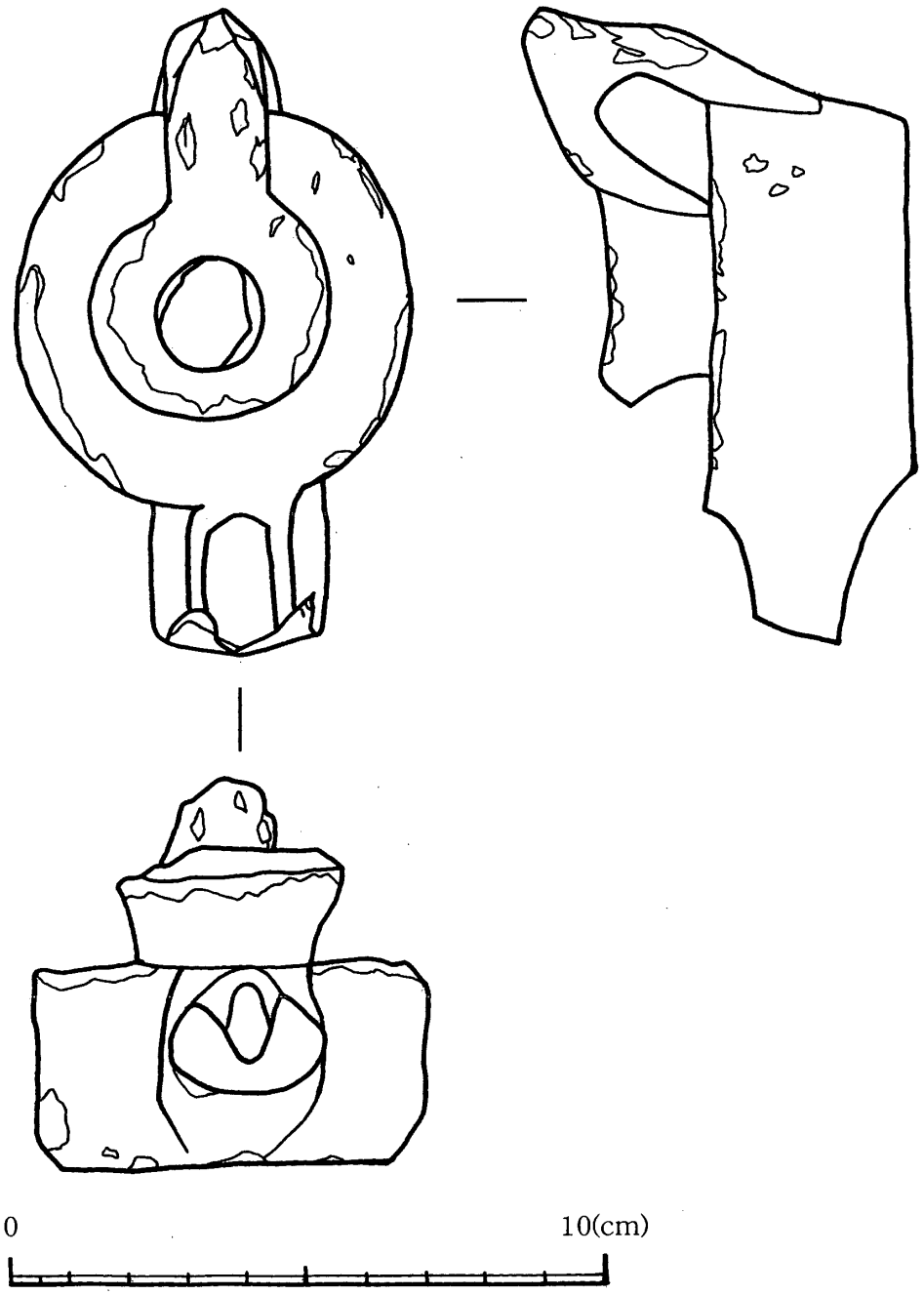


図6　緑色釉薬テラコッタランプ実測図

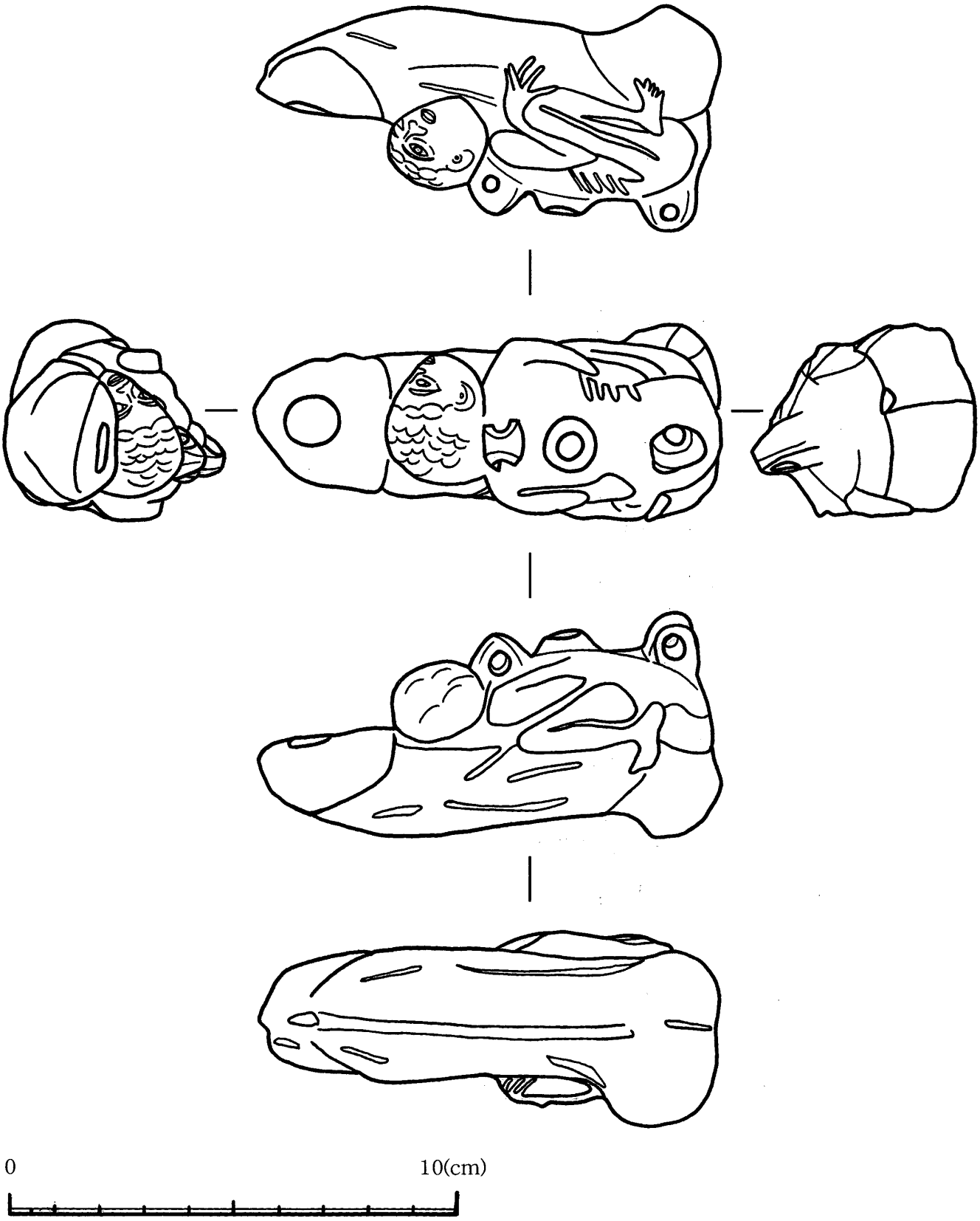
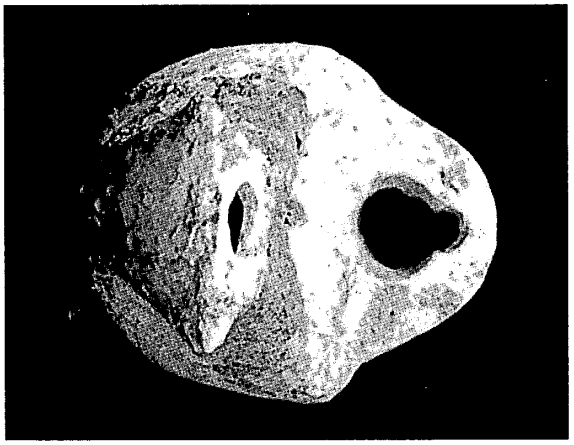
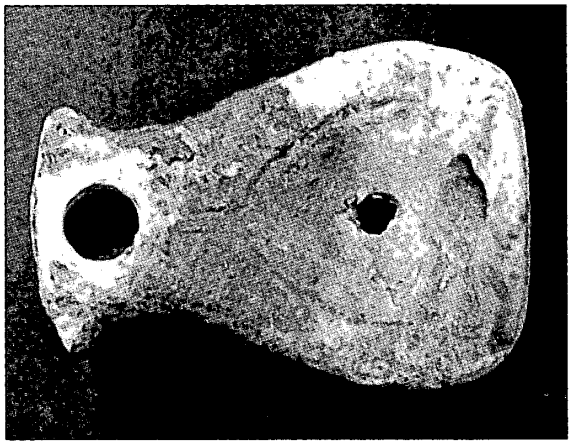


図７　男性生殖器型テラコッタランプ実測図





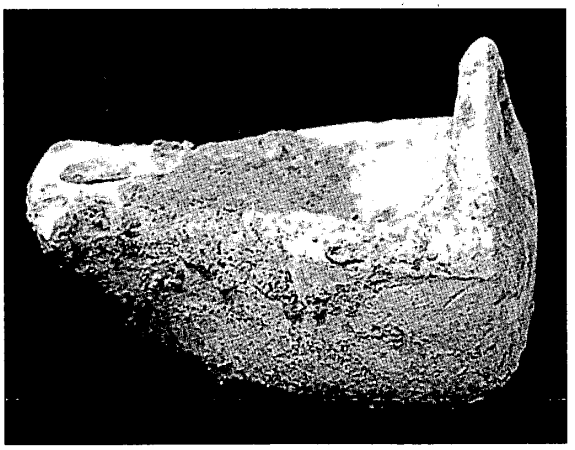


写真１　白褐色テラコッタランプ

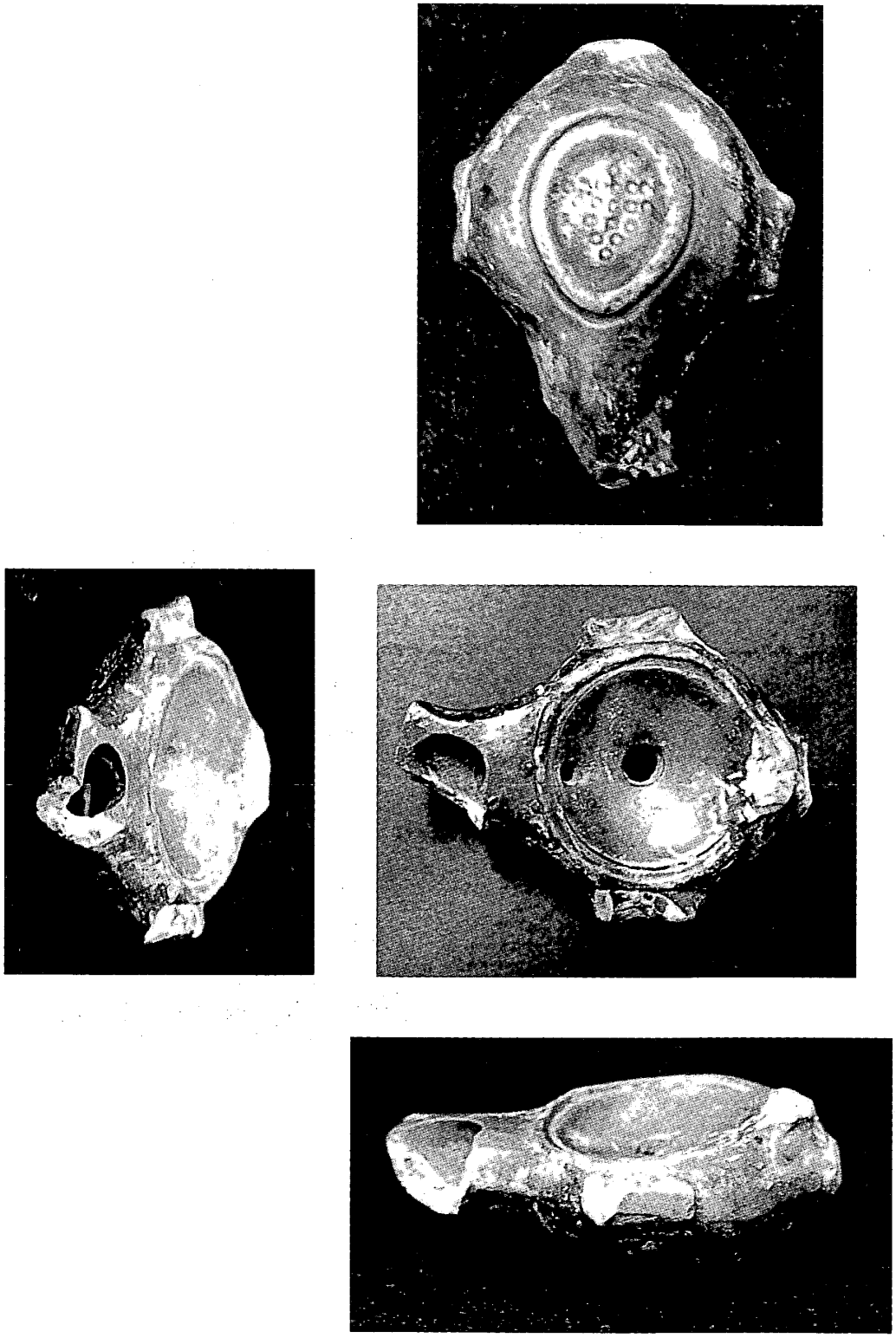
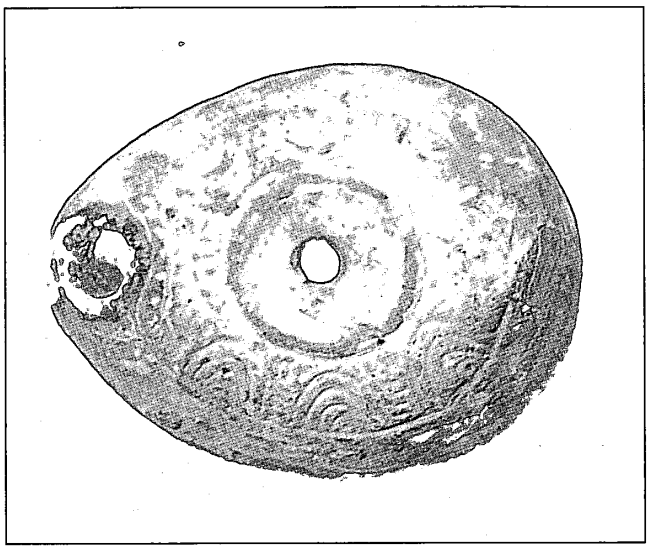


写真２　茶褐色底面葡萄紋テラコッタランプ



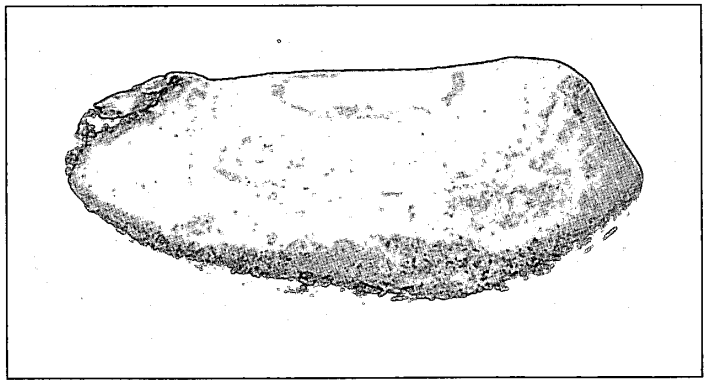
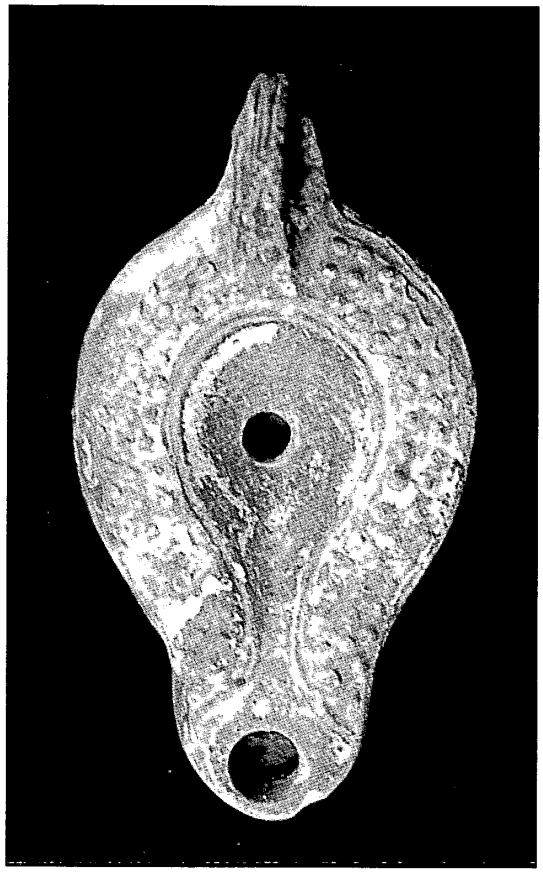
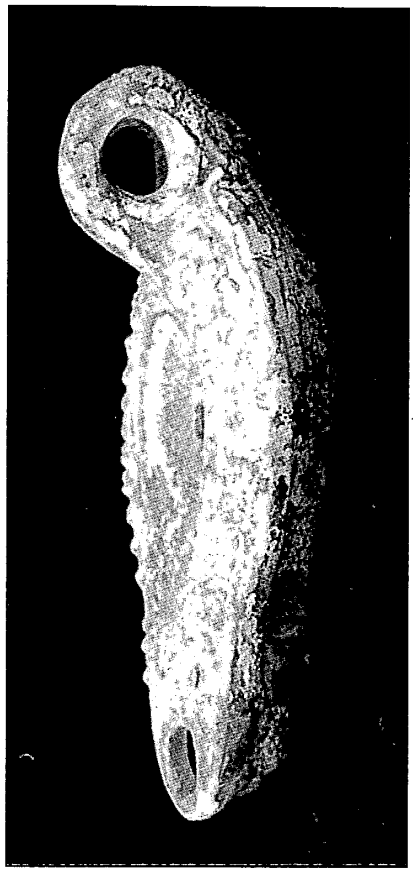


写真３　桃色同心円紋テラコッタランプ





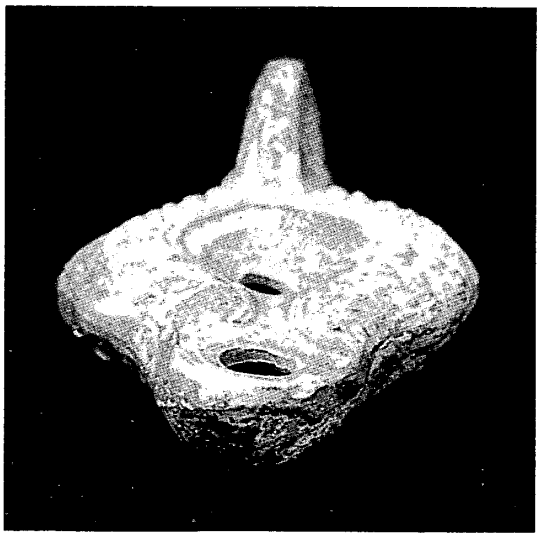
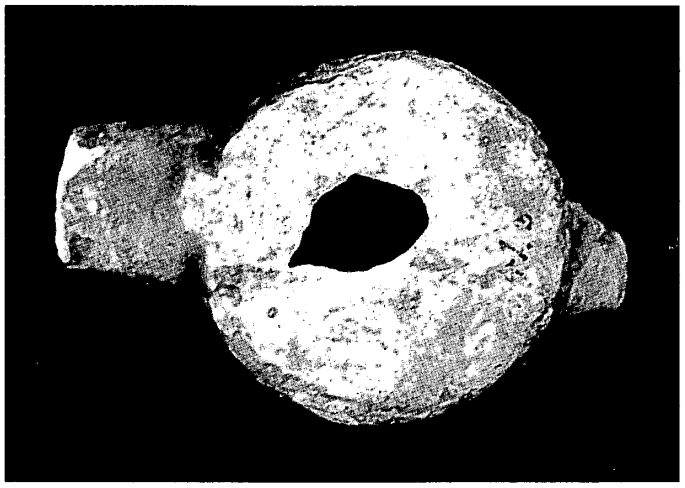
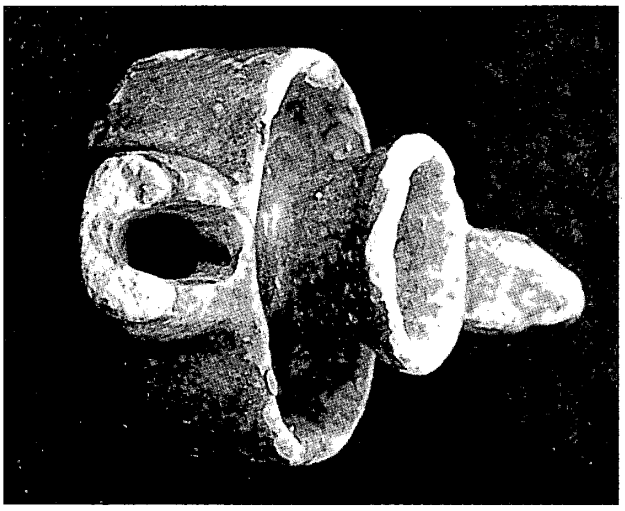


写真４　茶褐色小突起紋テラコッタランプ





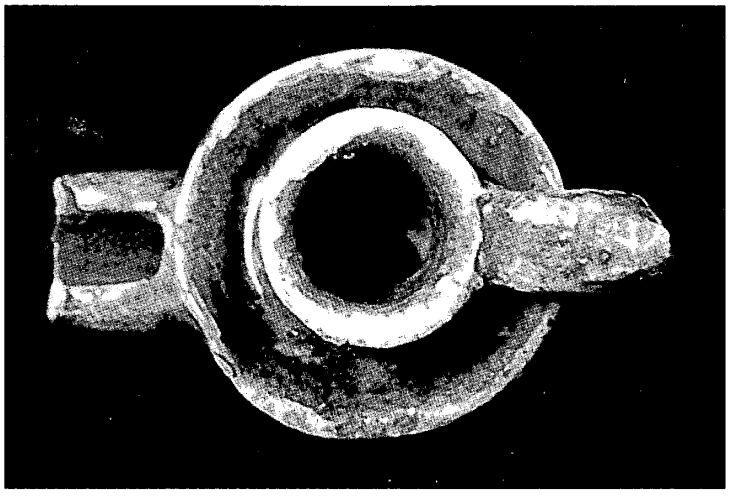
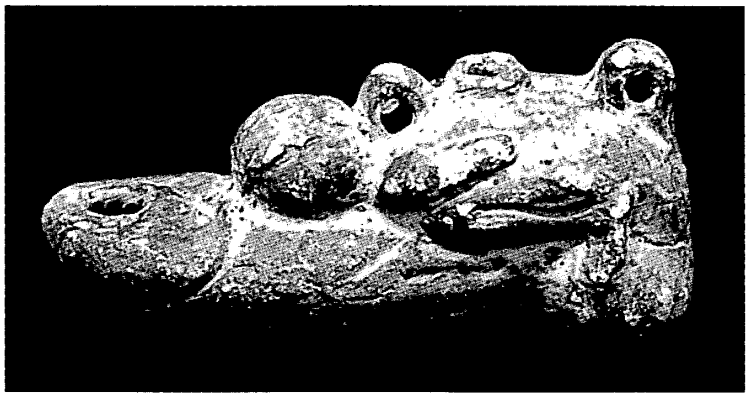
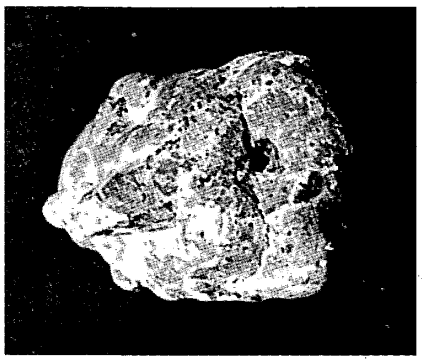


写真５　緑色釉薬テラコッタランプ





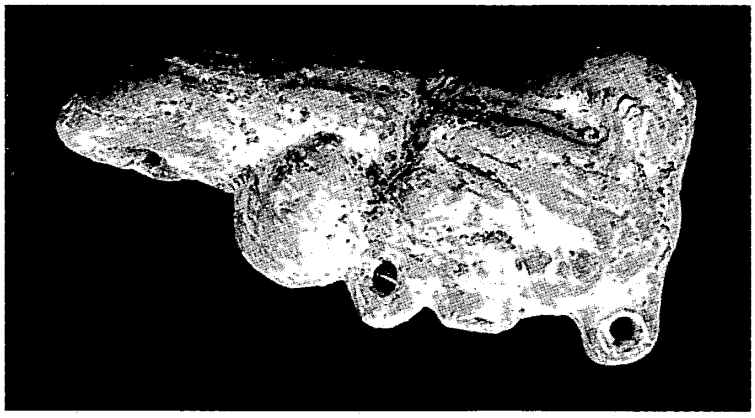


写真６　男性生殖器型テラコッタランプ